『養生要論』をめぐって

趙　菁

1. はじめに

江戸時代、養生論が多く出回った。江戸時代の養生論には、衛生、栄養、生理の基礎知識、養育、簡易な治療法などに関する健康論のみならず、道徳観、倫理観、教育観等も多く含まれている。人々は病気の有無とは関わりなく養生論を読んでいた。養生は江戸の人々が共有していた文化である。養生論の最盛期は文化、文政、天保期で、江戸開幕以降、明治改元までに刊行された養生論はおよそ300部と推定される(1)。その時代においては、医師はもとより、儒者、国学者、蘭学者、禅僧、文芸家、絵師などが競って養生論を著した。

本稿で取り上げる『養生要論』は国学者、儒者である鈴木朖が著したものである。鈴木朖は本居宣長の弟子で、宣長の没後、本居門を支えた人物であり、また尾張藩明倫堂初の国学教師でもある。『養生要論』は天保4（1833）、朖70歳の年に書かれ、天保5年（1834）に刊行されたものである。この書が好評を得たことで、その2年後に続編も著し、彼の没後の天保11（1840）に刊行された(2)。

朖の養生論に関する研究には、渋谷宗光（1972）は朖の出身地の文学環境を概観し、『養生要論』を活字化した。そして、桜井進（1980）は、『養生要論』の成立及び書肆、医学とのかかわりを検討した。これらの先行研究は朖の養生論を理解するには重要な手引きを与えてくれるが、『養生要論』の内容の詳細な分析は欠けている。本稿は『養生要論』の内容分析の第一歩として、『養生要論』に多く引用されている中国、日本の書籍、人物、そして西洋に関する記述をまとめることにする。

その前に、なぜこのようなまとめが必要であるかについて、『養生要論』に対する周囲の評価を見てその理由を述べていく。

2.『養生要論』に対する周囲の評価

鈴木朖は医者の家に生まれ、兄弟、親類に医師があったが、彼は「修貴斎説」[3]において、医は「国を経るの志、世を輔くるの義」がないことを理由に「賤業」であると医者を嫌っていた[4]。朖は医者とはならなかったが、医に対しては自らの考えを持ち、「修貴斎説」のほかに「不求堂説」、「答子勉論医薬書」[5]にも、医の社会的なあり方への意見や医薬の効能について自然治癒力を中心とした考えが述べられている。そして、最も知られたのは、彼の独自の養生法を示した『養生要論』である。ついでながら、宣長は「授業門人姓名録」[6]で朖のことを「儒医」と記している。

朖の弟子丹羽勗(1773～1841)は『養生要論』のはし書に次のように書いている。

> 養生の心得方、世に追々其の書あり、これをおこなふ事こそ難けれ、大方は皆人のしれる事なれども、我　師翁の此論は、行ざる人の為には、重言の咎もあらじとて、かくれなき事をもつぶさに録され、又世間の論に、心づかず、漏たること、或は心得違の有事どもを、明に弁ぜられ、又養生の道は、養生のみにあらず、全く身を修め道を行ふ筋と、一致なることをも明されたり、(中略)延寿長生、強壮平康、さては修身行義の益をも得ば、誠に著述の本意にかなふべし、吾等がふかく願ふ所なり（『養生要論』オ）

丹羽勗は朖に厚く信頼された弟子であり、朖のために書を多く写し、そして朖の草稿を多く清書し、朖の学を忠実に継承した人物である[7]。このはし書に記された文書はいわゆる朖の考えと考えても良かろう。

『養生要論』が書かれた時までには、世の中に養生に関する書物は、すでに結構な数があった。発行年のわかるもののみでも100部近くあった[8]。はし書にいうように、朖は従来の論とは別に、養生をわかりやすく、丁寧に説明し、また従説が気づいていなかったり、或いは漏れたり、間違ったりしている箇所を補い、改正したのである。さらに、はし書はこの書の著述本意をまとめてい

る。それは、朖が『養生要論』を通して、養生の道を人々に示そうとしており、その道とは長寿、健康のみの道ではなく、「修身行義」の道でもあるということであった。

丹羽勗のこのはし書は『養生要論』の要旨といっても過言ではない。『養生要論』の特徴はこれによって端的に示されていると思う。『養生要論』という書の性格を分析する際に、このはし書を見落としてはならない。

続いて、『養生要論』を読んだ人の評価を見てみよう。まず、高橋広道（笠亭仙果）（1804～1868）[9]の著書『雅俗随筆』に見る次の文章から窺える。

> いづれも俗人幼童にも心得易かるべく書綴られて、高尚めきたる文体にあらず。故に見る人その近きを以て忽にし、浅げなるものと見過ごすもあるべし。浅げなる所に深長の意味あり、養生要論は殊に俗談を専らとせられ、貝原先生の養生訓などとは格別の教えにて、養生の理を究めつくせり。[10]

戯作者である高橋広道は朖の弟子でもある。彼が『養生要論』に関心を抱いたのは、まずその文体であった。これは戯作者ならでの視点であろう。高橋によれば、『養生要論』は必ずしも雅な文体とは言えないが、庶民ないし子供がわかるような文体で書いているので、読む人にはとてもわかりやすい。そのわかりやすいことをもって朖の文を浅いと勘違いする人がいるかもしれないが、その浅く見えるところに含まれる意味が奥深い。

『養生要論』の庶民による受け入れ状況については具体的な調査が必要であるが、戯作者高橋広道の評価から、『養生要論』の人気の度合は推測し得る。

また、著名な貝原益軒の『養生訓』と比較して、『養生要論』はまったく異なる教えにおいて養生の論を究めていると高橋は認識している。これは、ようするに、『養生要論』を『養生訓』と同レベルのものとして見ている。朖の弟子だからそう言ったのか、それとも当時の人々がみなそう思ったのかについては、検討する余地があるだろう。

『養生要論』についての評価は快いものばかりではなく、次に取り挙げる本居大平の批評文はかなり辛辣な評価である。

> 鈴木朖は本居翁の教子にて世にも名の聞えて古学家とも少かは云れた

る者なるに此書を見れば漢意(カラゴコロ)の語(コト)こそ甚多けれ（中略）朖ははじめ西戎学(カラマナビ)をもはらとせしが後に本居大人の教子となりしなれば始よりの漢意の心にしみ所謂(イハユル)先入主となりてかく書るものにもさる漢意の語(コト)の交れるなり惣(スベ)て今の世古学をものする人といへどもはじめ西戎学もふけりし人は己れのみ大和魂と思へども実(マコト)の大和魂より見れば漢心の交れるものなり鈴屋先生の「から心无しと思へど書(フミ)らよむ人の心はなほぞ漢(カラ)なる」とよまれしは実(ゲ)にさることなりよく思ひ考ふべし。(11)

本居大平（1756〜1833）は宣長の後継者で、朖より 8 歳年上である。宣長没後、宣長の学問を忠実に守り、門人たちに講義、歌会、書簡による通信指導をし、鈴屋を仕切った人物である(12)。朖は宣長没後、大平を助けて本居学派を支えていたと思われる。ここに挙げている批評文は、『養生要論』が出版される前の浄書文を見て大平が書いたものである。

大平は朖の学問研究の姿勢に不満を抱いていたことがこの文から読み取れる。大平によれば、朖は名の知られる古学家であるが、彼は漢学を習った後に宣長の弟子になったので、その心が漢学に染まっており、（国学より）「漢心」が先に入っている、だから、朖が書いた文書には「漢心」の言葉が混入しているということである。また、上の引用文に取り上げていないが、孔子、文王などのような漢人に敬語を使い、貝原益軒、熊沢了芥のことを普通の文体で述べる朖の文章に対して、大平がかなり不満を持っていることが批評文から指摘できる。

大平にしてみれば、朖が古学をする人といっても漢学に没頭したので、自分では大和魂と思っていても、真の大和魂からそれをみると、「漢心」がその中に混じっている。大平は、さらに師宣長の和歌では「から心無しと思へど書らよむ人の心はなほぞ漢なる」はこのようなことを指しているので、よく考えるべきことであると師の言葉を借りて朖への批判を強めている。

大平のこの批判文は、実は、直接朖あてのものではなく、朖以外の第三者に与えられたもので、後に版本に添付されたのである(13)。大平は天保 4 年に亡くなり、『養生要論』は朖が天保 5 年に自序をつけて刊行した。朖が大平の批評文を見たか否かに関わらず、大平の批判は直接に朖にあてていないところからは大平の朖への配慮が窺えるが、朖に対する強い批判であることは疑いを入れ

ない。そして、大平個人の意見にとどまらず、これは朖に対する宣長門の意見を代表するものではないかとも考えられる。

朖は宣長が亡くなった後に大平を助けて本居学派を支えていたのに、なぜこのような批判を大平から受けなければならないのだろうか。もし、宣長が朖の研究姿勢を認めていたならば、宣長の忠実な後継者である大平が師の考えを押し切って、同輩であり、自分の支え役でもある朖にそのような批判を下すことができるだろうか。『玉勝間』にみる宣長の儒者、儒学批判はやはり朖にも向けられたとも考えられるのではないか。この点については今後さらに検討していく必要がある。

このような批判を招いた『養生要論』には、いかなる「漢意の語」を取りあげ、養生を論じたのであうか。本稿は以下において『養生要論』に出現した中国、日本と西洋の書物、人物に関する箇所をまとめることにする。

3. 『養生要論』にある中国、日本と西洋の書物、人物

『養生要論』は、57 段落を設け、段ごとに話題を持ち、養生についての心得を論じている。版本には、各段の頭に○をつけているが、渋谷宗光による翻刻本には○に数字をいれている。本稿は、諸引用文に、版本に示された順番及び翻刻本に附加された段落順も記すことにした（例えば、「(十六ウ) (25)」という記述においては、十六ウは版本に示された順で、25 は翻刻本につけられた段落順を指す)。また、前後の文脈を理解するにあたって、必要に応じて、引用文の前後の文書を取り上げ、[　]で記した。(14)

『養生要論』に出てくる書名、人名によって、中国、日本、西洋と三つに分類して整理することにした。出典のはっきりわかるものについては、引用文の次に出典の原文を明示している。

3.1 中国関係(15)

（1）『論語』

①知命[体仁]（二ウ）(2)

『論語』卷十　尧曰第二十

子曰、不知命，无以为君子也。不知礼，无以立也。不知言，无以知人也。

②不憂不懼、[即養神之善術也] (二ウ) (2)

『論語』卷六　颜渊第十二

司马牛问君子。子曰："君子不忧不惧。"曰："不忧不惧，斯谓之君子已乎？"

③[節慎飲食]、不事酔飽、[則保身之常道也] (二ウ) (2)

『論語』卷五　子罕第九

则事公卿，入则事父兄，丧事不敢不勉，不为酒困，何有于我哉？"

『論語集注』卷五　子罕第九

使肉胜食气。酒以为人合欢，故不为量，但以醉为节而不及乱耳。

④孔子心を用ざる者を深く戒められたり。云々。孔子心を用ひざる者を難哉と戒られたる。難い事の筋さまざまある中に、養生の難その一つ也 (七オ) (12)

『論語』卷九　阳货第十七

子曰："饱食终日，无所用心，难矣哉！不有博弈者乎，为之犹贤乎已。"

⑤[色慾飲食の節し方は、慎むよりは忘るるを善しとす、忘るる仕方は、孔子ののたまはく]、学を好み事に敏なる君子は、自然と暇あらずして、飲み食ひに酔飽を求る事なく、起き臥しに宴安を求事なしとのたまへり (十八ウ) (30)

『論語』卷一　学而第一

子曰："君子食无求饱，居无求安，敏于事而慎于言，就有道而正焉，可谓好学也已。"

(2)『礼記』

・[鴆毒燕安]、遠色[窒慾] (二ウ)(2)

『礼記』中庸第三十一

齐明盛服，非礼不动。 所以修身也；去谗远色，贱货而贵德，所以劝贤也。

(3)『周易』

①知命(二ウ)(2)

『周易』 系辞上

道济天下，故不过；旁行而不流，乐天知命，故不忧。

②体仁(二ウ)(2)

『周易』上経

君子体仁，足以长人；嘉会，足以合礼；利物，足以和义；贞固，足以干事。

③不憂不懼、[即養神之善術也] (二ウ)(2)

『周易』周易 - 系辞上

旁行而不流，乐天知命，故不忧；安土敦乎仁，故能爱。范围天地之化而不过，曲成万物而不遗。

④[鴆毒燕安、遠色]窒慾、[則守性之良規也](二ウ)(2)

『周易』下経

《象》曰：山下有泽，损。君子以惩忿窒欲。

⑤節慎飲食、[不事酔飽] (二ウ)(2)

『周易』上経

《象》曰：山下有雷，颐。君子以慎言语，节饮食。

⑥周易に云く、山下に雷あるは頤也、フトノコト君子以て言語を慎み、飲食を節す、これに本づきて渡世の語に、禍は口より出づ、病ひは口より入るといへり、誠に不易の名言也(三十三ウ)(56)

『周易』上経

民，颐之时大矣哉！ 《象》曰：山下有雷，颐。君子以慎言语，节饮食。

(4)『尚書』

①知命(二ウ)(2)

『尚書正義』卷二 尧典第一

若尧知命在舜，舜知命在禹，犹求于群臣，举于侧陋，上下交让，务在服人。

卷十 高宗肜日第十五

天既以义为常，知命之长短莫不由义，故云“天之下年与民，有义者长。无义者不长”也。

② [夙夜不懈]、所其無逸、[則行気之妙訳也](二ウ)(2)

『尚書正義』卷十六 无逸第十七

周公曰："呜呼！君子所其无逸。叹美君子之道，所在念德，其无逸豫。

(5)『詩経』

①知命(二ウ)(2)

『詩経』国风·鄘风

乃如之人也，怀婚姻也。大无信也，不知命也。

②夙夜不懈、[所其無逸] (二ウ)(2)

『詩経』国风 魏风

陟彼岵兮，瞻望父兮。父曰：嗟！予子行役，夙夜无已。上慎旃哉，犹来！无止！

周颂· 闵予小子之什

永世克孝。念兹皇祖，陟降庭止。维予小子，夙夜敬止。于乎皇王，继序思不忘。

『资治通鉴』卷第十七

明文、武之功业，周道粲然复兴，此夙夜不懈行善之所致也。

(6)『老子』

①[養生の肝要は]　されば老子に云く、民の生を喪ふは、その生々の厚きに因れりといへり、生々とは生を生とすとよみて、此身に養ひの甚厚く、馳走があまりに過るによれりといふ事なり。(五オ)(6)

『老子道德经校释』第五十章

老子云："人之生生之厚，动皆之死地，十有三。

『老子道德经校释』第七十五章

人之轻死，以其生生之厚，是以轻死。

②知足は老子の戒也。(十二ウ)(21)

『老子』道德经

胜人者有力，自胜者强。 知足者富。强行者有志。

『老子道德经校释』第四十四章

故知足不辱，知止不殆，可以长久。

(7)『荘子』

①恬淡寂漠、神将来舎、精神内守、病何由生、これは老荘が唾余也(六ウ)(11)

『庄子·内篇』

水静犹明，而况精神！圣人之心静乎！天地之鉴也，万物之镜也。夫虚静恬淡寂漠无为者，天地之平而道德之至也。

『庄子·内篇』

夫徇耳目内通而外于心知，鬼神将来舍，而况人乎

②恬淡を好む荘周が言にも、人の心を水にたとへて、欝閉して流れざるも、亦清む事あたはずといへり。[げに心は流水の如くにありたき物にて、智者の楽しむ所是なるべし](八オ)(13)

『庄子·内篇』

水静犹明，而况精神！圣人之心静乎！天地之鉴也，万物之镜也。

③荘子のいはく、今時の如き戦国の、物忽なる山道を行には、武士を多くつれ、武器を携へて、用心甚厳しけれども、飲み食ひの席上、紙席の上に、身を亡ぼす大敵あり、これを恐るる事を知らざるは、油断の至極なりといへり(二十九ウ)(49)

『庄子·内篇』

夫畏涂者，十杀一人，则父子兄弟相戒也，必盛卒徒而后敢出焉，不亦知乎！人之所取畏者，衽席之上，饮食之间，而不知为之戒者，过也。

(8)『左伝』

①鴆毒燕安、[遠色窒慾](二ウ)(2)

『春秋左传』闵公（元年～二年）

管敬仲言于齐侯曰、戎狄豺狼，不可厌也。诸夏亲昵，不可弃也。宴安鸩毒，不可怀也。

②[節慎飲食]、不事酔飽、[則保身之常道也] (二ウ)(2)

『春秋左传』昭公（十一年～二十年）

我王度，式如玉，式如金。形民之力，而无醉饱之心。

(9)『史記』

・周公旦の無逸にいはく、文王は庶政を勤めたまひて、朝より日の中呉に至るまで、食するに暇あらず、文王命を受玉ひしは中年にて、其国を享たまひし事五十年といへり(六ウ)(11)

『史记』鲁周公世家

成王发府，见周公祷书，乃泣，反周公。周公归，恐成王壮，治有所淫佚，乃作多士，作毋逸。毋逸称："为人父母，为业至长久，子孙骄奢忘之，以亡其家，为人子可不慎乎！云云 "文王日中昃不暇食，飨国五十年。"作此以诫成王。

(10) 華陀

①五禽の戯も、怡而汗出、身体軽便にして飲食といへり(三オ)(5)

②もろこしの医者の内に、我が誠に心服したるは、華陀なり、用薬不過数種、といふ事、薬のあまり益なきことを善知たる、是第一の卓見とおもはる、又五禽の戯至てよき趣向也、寒やみを灌水にて直したるも面白し、頭痛を療するに頭を刺して血をとるといふこと、小説に見えたり、華陀が心げにさもあるべし。(五ウ)(8)

『三国志』魏书 方技传

华佗字元化，沛国谯人也。一名旉。游学徐土，兼通数经。沛相陈珪举孝廉，太尉黄琬辟，皆不就。晓养性之术，时人以为年且百岁而貌有壮容。又精方药，其疗疾，合汤不过数种，心解分剂，不复称量，煮熟便饮，语其节度，舍去辄愈。

③華陀が云く、人体は労働を欲す、流水くさらず、戸枢むしばまずといへり(十三ウ)(22)

『三国志』魏书 方技传

佗语普曰："人体欲得劳动，但不当使极尔。动摇则谷气得消，血脉流通，病不得生，譬犹户枢不朽是也。是以古之仙者为导引之事，熊颈鸱顾，引輓腰体，动诸关节，以求难老。吾有一术，名五禽之戏，一曰虎，二曰鹿，三曰熊，四曰猿，五曰鸟，亦以除疾，并利蹄足，以当导引。体中不快，起作一禽之戏，沾濡汗出，因上著粉，身体轻便，腹中欲食。"

(11) 李漁笠翁

・薬の益すくなしとは如何、これは清人李漁笠翁が論にも見えて、おのが漢文の、丹羽子勉に答ふる書にくわしくいへるがごとし(五ウ)(10)

『肉蒲團』巻之一　第一回　止淫風借淫事説法　談色事就色慾開端

人參附子雖是大補之物，只宜長服，不宜多服；只可當藥，不可當飯。若還不論分兩，不拘時度飽吃下去，一般也會傷人。

(12) 三蔵法師

・唐の代の法顕三蔵と云法師、天竺にいたりて、かなたの僧の風儀を見るに、病む時は七日断食するを療治とす、七日断食してなほらざれば、始て観音を祈るといへり(二十七ウ)(46)

(13) 晋の何曾

・晋の何曾と云栄養もの有て、何を食てもうまからずとて、せゝり箸のみするをよせいにしたる者あり、余かつて戯に漢文をかきて、楠の詞によりて何曾を療治したる事あり(五オ~ウ)(7)

『晋书』列传第三

（何曾）然性奢豪，务在华侈。帷帐车服，穷极绮丽，厨膳滋味，过于王者。每燕见，不食太官所设，帝辄命取其食。蒸饼上不坼作十字不食。食日万钱，犹曰无下箸处。

3.2 日本関係

(1)『備荒録』

・備荒録といふ物に、飢人を救ふしかたを載ていはく、大いに飢つかれたる者に、忽食を多く与ふれば、死に至る事あり、先薄き粥を少々づつ与へおきて、さて後にそろそろ食をあたふべしといへり(二十七ウ)(46)

建部綾足『民間備荒録　巻之下』[16]

療垂死飢人法

餓て死せんとする者に、急に食を與ふべからず、往々狼呑て死する者也、先づ

稀粥を煮て汁椀にもり、卓のうへにのせ、飢人の前へ置、口を付てそろそろ吮せ、漸々に吮盡させよ、如此して気力調へて後、飯を少づつ喰せよ、惣じて飢人は腸細くなるものなれば、不堪頓食ものなり

(2)『徒然草』

・[在所ものあり、御城下に至りて物語のついでに、焼たる餅に黒砂糖をつけて食ふは、いみじき薬なり、といふを聞て皆々笑ひて、誠に在所ものなりといへり、] これは兼好が徒然草に載せたる、法然上人の詞に、念仏往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり、といはれしによく似たる事なり(十八ウ)(29)

『徒然草』第三十九段

或人、法然上人に、「念仏の時、睡にをかされて、行を怠り侍る事、いかゞして、この障りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。また、「疑ひながらも、念仏すれば、往生す」とも言はれけり。これもまた尊し。

(3) 貝原益軒

・[色慾飲食の節し方は（中略)、千金方に房中の術を云事をのせて、是をよく行へば長寿を保つ（中略）]然るを貝原先生の養生訓に、これを取用ひられて、さもある事のやうにいひ置かれたるはいかが、あの先生には近頃似合ぬ事なり(十九ウ)(30)

『養生訓』巻第四　「慎色慾」[17]

男女交接の期は、孫思邈が千金方に曰。云々。○今案ずるに、千金方にいへるは、平人の大法なり。もし性虚弱の人、食すくなく力よはき人は、此期にかかはらず、精気をおしみて、交接まれなるべし、色慾の方に心うつれば、あしき事、くせになりてやまず、法外のありさま、はづべし、つひに身を失ふにいたる、つつしむべし。

(4) 楠正成

・楠正成云はれけらく、珍膳も常に向へば甘からず、権現様仰られけるは、食は常々粗食をするがよし、一月に一両度は美食をすべし、と仰せられしとかや(五オ)(7)

(5) 熊沢了芥

①熊沢了芥云く、忠良の臣、国のため君のために勤労憂苦しても、多く長寿なるは、私欲の筋とはちがひて、心をいたむる事なき故也といへり(六ウ)(11)

②[華陀が云く、人体は労働を欲す、流水くさらず、戸枢むしばまずといへり(中略)] 熊沢の集義書にも此事いひおかれたり(十四オ)(22)

③熊沢了芥先生若年の時、身の肥さうになりたるを見て、他人の肥て気むつかしく、身取廻しの悪しきを見れば、肥てはならじとて、ゆるこ雑炊と云者のみを食して、弥身をこなし、終に肥ず、四十以後、大病折々煩ひたれど、我等が如く病見にて薄身をしたる者はなし、といはれたり(三十一オ)(52)

(6) 手島堵庵

・手島堵庵が歌に　百薬の、長といはるるその酒も、毒になるほどのむは身しらず(九ウ)(17)

(7) 江村専斎

・江村専斎は百余歳まで長寿を保てり、後水尾院様へ召されて、長寿の心得方を御尋被仰下たるに、何事も少し少しと申事を相慮り候、と御答申上たりとぞ、[げに飲食色慾等、節慎の道、尤さも有べき事也](十ウ)(19)

(8) 新井白石

・元禄の頃にか、白石先生新井筑後守殿、ある時、侍は何の稽古をもすれども、いつ切腹をすべきもしらぬに、いまだその稽古をばせずとて、安座し

て芝を横一文字に腹にしきて、両端中と火をつけて、けぶたきままに扇づかひして、火滅るまで身うごきもせで云はれけるは、これでは腹を切るとても、見苦き体はせじ、といひおられたり、その灸の跡膿爛れて、久うしていえたりける其後多年の積気、おもはずしらず平愈して、壮健になられたりとぞ(二十六オ)(43)

(9) 古方医

①人参の古名をくまのゐと云て、功能は胸前をすかす他なし、と近頃の古方医の説にいへる (十五ウ) (24)

②古方医云く、人を補益するは穀肉菜果にこそあれ、薬に補薬と云はある事なしと云は誠によし (十六ウ) (25)

吉益東洞『医事或問』巻下 (18)

日本にても、天暦帝の朝源順の和名抄に、人参の古名くまのゐとあり。

仲景も人参は心下の痞鞕を治すといふて、つゐに気を補ふといふことなし。

③また古方医、薬瞑眩せざれば、其疾いえずと云語を引て、腹痛吐瀉のたぐひをも皆瞑眩と心得て、瞑眩せざれば、病といえず、とかたくなに心得るものあり、云々、古方医瞑眩せず、霍乱せざれば病はなほらずと心得るも、後世医のべんべんとして、温補甘補を云たて居るも、皆同様のあやまり也 (十六ウ~十七ウ) (25)

吉益東洞『医事或問』巻上(19)

その病人泄瀉の症にて、世医治しがたしといふ。(中略) 余曰、此方の療治は世上大いに恐るるなり。其故は今の医の甚やはらかなると云ふ薬も、此方に用ひ、病に的中する時は、大いに瞑眩するなり、其瞑眩に恐れては、病治せぬもの也といひければ、病家の者、会得して薬を乞。

朖は著名人の話のみならず、一般庶民の話、特に自分の近辺にいる人々のことをも取り上げている。例えば、医師川村、姉婿の柴田龍渓、我伯兄、或士人、幼き時老人の物語、或侍の妻など。

3.3 西洋関係

(1) 西洋の医書

・西洋の医書に、前の食未消、後の食はやく至る時は、病となるといへり(九ウ)(15)

(2) ウルユスというおらんだの方

・[厚味の物を或はよん所なく、或は過まりて飽食したる時は、即時に指をさし入れて、吐却するが甚よし、程経て後ならば、瀉薬を以て下すべし] ウルユスというおらんだの方、飲酒を好む者の常に服して、腸胃を滌ひ清め、諸病の根本たる滞飲を除く良薬なり、[これは大黄に阿煎薬を加えたるもの也、其功は大黄一味にあり、あせん薬はただ調味也] (九ウ)(18)

(3) おらんだ人

①今長崎に居るおらんだ人、食後に必二町ばかり歩行すといへり (八ウ)(16)

②おらんだ人は橙の皮の油をとりて、健胃の薬とする也 (十六ウ)(25)

(4) 西洋ヨーロッパ人の説

・[養生の肝要は、たゝ貧窮下賤の身の上にならふにあり (中略) 天下の人前にても、男女千人の所にて、女の数必五六人不足する物也、] 西洋ヨーロッパ人の説をきくにも亦同じければ、天地の間かはりなしと見えたり (四ウ)(6)

朗が西洋について関心を抱いていたことは、その著『離屋学訓』にも見出せる。[20]

> 於蘭陀ノ学問ノ事、近頃ヤウヤク開ケカカリタルハ、亦コレ明ケキ御代ノ一ツノ験ナリ、漢国ノ人情ヨリハマサリテ、質愨精明ナル所アリ、浮タル事をイハズ、疎謬ナル事少キヤウニ見エタリ、軍法、地理、諸国ノ記載、医術、歴算、又ハ利便ナル器用等ノ書、追々ニ飜訳出来タラバ、世ノ益トナル事モアルベシ

漢学は朗の学問体系においては非常に大きな存在であった。朗はその漢学の基盤の上で、学問研究の更なる発展に挑んでいたことはいうまでもない。しかし、『養生要論』にある西洋の説、そして、『離屋学訓』に記されたこの考え、

さらに、彼の蔵書[21]にエンゲルベルト・ケンフルグの『鎖国論』、マテオ・リッチの『職方外記』が収められていることから、朖は次第に西洋の学問、学説にも開眼していったと指摘できる。

4．おわりに

『養生要論』はいかなる書であるか、その性格については、飢饉への対応を説く救荒書、過食により健康を失った都市民衆に対する実用医学書であると論じられている（今田 1977、桜井 1980）[22]。確かに、『養生要論』は『民間備荒録』を引用して「飢人を救ふしかた」を語っている。また、上流階級の過食と薬の乱用についても警告と解決法を与えた。『養生要論』はこのように、救荒書、実用医学書的な部分がある。しかし、その前に、この書が「修身行義」の教養書であることを忘れてはならない。これこそ、朖の『養生要論』を著述する本意であることは、そのはし書に明確に示されている。

本稿は『養生要論』に対する評価及び、『養生要論』に取り上げている中国、日本と西洋の書物、人物についてまとめたが、今後、それらについて詳細な分析を行いつつ、『養生要論』に対する江戸の人々の関心度、読まれる度合いについても調査し、『養生要論』が江戸時代の人々をどのような道に導こうとしているかについてさらに追究していきたい。

【注および文献】

(1) 吉原瑛「江戸時代養生書出版年表」『群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編』第 33 巻、1998、119～125 頁）によれば、発行年のわかるもので、総合的に養生を述べたものは 130 部であり、それに発行されたが発行年の不明のものと元禄期以後に再改版された少部のものを加えると 300 部はあったと推定される。

(2)『養生要論』の書誌について、桜井進の「『養生要論』小考」（『文莫』第 6 号、1980）に参照されたい。

(3)『離屋集初編』26 ウ

(4) 桜井注 (2) 前掲論文によると、これは医の全面否定論ではなく、現実の医のありようへの批判に支えられた医の理想を求める言葉であった。

(5)『離屋集初編』29 ウ、44 ウ

(6)『本居宣長全集第二十』筑摩書房

(7) 岡田稔・市橋鐸著『鈴木朖』「離屋門下の人々」鈴木朖顕彰会、1967 年、46 頁

(8) 吉原瑛注 (1) 前掲論文による計算

(9) 高橋広道 (1804〜1868)：笠亭仙果(りゅうていせんか) (初世)、戯作者、尾張熱田中瀬の人。熱田の神官磯部政春に手習いと素読を学び、のち鈴木朖・本居大平・本居内遠に師事した。1829 年柳亭種彦に入門、1831 年戯作者として登場。1858 年柳亭種彦二世を自ら称して、一門の抗議を受け、梅素亭玄魚の努力で 1861 年二世の相続が実現した。著に『笠亭仙果文集』などがある。(『国書人名辞典』岩波書店)

(10)『新燕石十種』第四、国書刊行会、1912、260 頁

(11)『文莫』6 号、鈴木朖学会、1980 年、37 頁

(12) 簗瀬一雄『本居宣長とその門流第二』(和泉書院、1990) に参照されたい。

(13) 注 (2) 桜井前掲論文、21〜22 頁

(14)『日本衛生文庫』には『養生要論』の翻刻が載せられている。そして、渋谷宗光の「鈴木朖著『養生要論』」〔『大妻国文』3 号大妻女子大学国文学会 1972〕にも『養生要論』の翻刻が載せられている。『日本衛生文庫』はテキストとしては信頼しかねると桜井進 (「『養生要論』小考」『文莫』6 号) は指摘する。本論文が引用する部分に関しては両書はほぼ一致しているが、渋谷の翻刻を参考とした。

(15) 文献調査にあたって、「中国古籍全录」 http://guji.artx.cn/を使わせていただいた。

(16)『日本経済叢書　八』日本経済叢書刊行会、1915、580 頁

(17)『養生訓・和俗童子訓』貝原益軒著　石川謙校訂、岩波文庫、97 頁

(18)『近世科学思想下』岩波書店、1971、358〜359 頁

(19)『近世科学思想下』岩波書店、1971、351〜352 頁

(20)『鈴木朖人と学問』鈴木朖学会、1979、39 頁

(21)「離屋蔵書目録」〔朖自筆手控え本〕(岡田稔・市橋鐸『鈴木朖』鈴木朖顕彰

会、1967、所収）

(22) 今田洋三の『江戸の本屋さん』（NHK ブックス、1977、185 頁)は『養生要論』を飢饉対策書として挙げている。桜井進の「『養生要論』小考」（『文莫』6号、1980、25 頁）では、『養生要論』は救荒書と実用医学書の二つの性格をもつ書として認識されている。